

主 題：キリストの支配に委ねた歩み①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章15節

テーマ：キリストにすべてを委ねた歩みとはどのようなものか？

今朝も続けて皆さんと見ていくのはコロサイ人への手紙3章のみことばです。タイトルにもあるように「キリストの支配に委ねた歩み」について、15-17節を通して数回にわたり学びたいと思います。まずはいつものようにみことばを読みしますので、それぞれ神様のことばによく目を留めてみてください。

コロサイ3：15-17

「15 キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。16 キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」

“焦点を絞る”ということ、これは一つのチームが目標達成しようとする上でとても重要なことです。例えば皆さんはスポーツのラグビーをご覧になったことはあるでしょうか？今まさにフランスの地でラグビーのワールドカップが行われていますが、その試合は、敵味方合わせて30人の屈強な男たちが一つのボールを奪い合って、相手のゴールラインを超えてトライすることを目指して激しく戦うからこそ、非常に見応えがあります。もちろんこれはほかのスポーツにも言えることですが、でもこのラグビーこそ、勝つためにはただ練習を積み重ねるだけではなくて、まさにチームが一丸とならなくてはならないスポーツなのです。日本代表もしっかりとした一つのチームを生み出すために、大会前からあることをしていました、何をしていたかご存じですか？彼らは、今回は“*Our Team*”というスローガンを掲げて焦点を絞って練習に励んでいました。「全員が責任を持って自分の役割をやり遂げよう！」と言い聞かせながらそれぞれが徹底していたからこそ、同じ思いを共有していた彼らは、最終的には敗退してしまいましたが、それでもいくつかの勝利を収めることができたのです。こうしてチームのみなが焦点を一つに絞って同じものに心を留め続ける、ということは大切なことでした。

そしてこれは、私たちの信仰生活においても、教会生活においても同じことが言えるのです。パウロは今回、信仰生活における焦点というものはっきりと描いていました。兄弟姉妹がともに生きていこうとするとき、いったい何に私たちが心を留め続けるべきなのかを教えてくださいました。どうですか？最初に読んだときに気づきました？もう一度見てみると15節にこう書いていましたね。「キリストの平和が支配するようにしなさい。」と。16節は「キリストのことばを豊かに住ませ」17節の後半には「すべて主イエスの名によってなし」と。「キリストの平和」「キリストのことば」「主イエスの名によってなし」つまりその焦点とは、これまでと同じです。「十分なイエス・キリスト」でした。新しくされた信仰者にとって、どんなときも、何をしても、ただ十分なイエス・キリストこそすべての中心となるべき存在でした。私たちはすべてをキリストに委ねて、キリストに心を留めながら、ほかの兄弟姉妹ともますます一丸となって歩んでいく、ということが欠かせないのです。さらに言えば、「キリストの平和」「キリストのことば」というものに私たちが支配され、「イエスの名によって」すべてのことを成していくということが求められていました。

では、いったいキリストの平和やことばに支配されるというのは、どういうことを言うのでしょうか？それは具体的にどんな歩みのことを言うのでしょうか？自分たちのすべてをキリストの支配に委ねた歩み

というのは、改めて言うところのどのような姿なのでしょう？そのことをパウロのことばからいまい一度、少しずつ一緒に考えてみたいと思います。きょうは15節から「キリストの平和に支配される」ということについて、特に二つ、まず「キリストの平和の定義」と「キリストの平和の効果」について順番に見てみたいと思います。ですからぜひ自分自身のこととして考えてみてください。果たして自分の歩みはそもそもキリストにすべてを委ねた歩みなのだろうか。そして私は、日々キリストの平和に支配された歩みを本当にしているのだろうか。この時間がひとりひとりの励ましと助けになることを心から祈っています。

○キリストの支配に委ねた歩み：“キリストの平和”に支配される

1. 定義：“平和とは何か？” 15 a 節

では早速一つ目、まず定義から考えてみましょう。15節の初めにパウロは宣べていました。「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。」パウロはここでははっきりと「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するように」と命じていました。提案していたわけではありません。命令を与えていたのです。でも、私たちの心を支配すべき、この「キリストの平和」というのは、いったい何のことを言っているのでしょうか？ここで使われていた「平和」ということばには、もともと「幸福や満足している状態」もしくは「何かとの間に一致や調和が生まれている状態」を表しています。HB・チャールズという先生はこのように説明しています。「平和とは悪意や敵意がなく、調和や幸せが存在するその状態のことです。」また、別の註解者もこのように言っています。「平和とは文字通り、離れ離れ、分割されていたものが再び結び合わされ、一つとなることを描いています。平和は、分裂や不和とは対極にあるものです。一致と調和の状態である平和は、戦争とは真逆のものなのです。」と。ですから「平和」とは「敵意や争いのない、一致して落ち着いた、満足している状態のこと」でした。一つとなっているからこそ、そこに安心や幸いというものがあるのです。

そして特にパウロはここで、単に「平和」とは言っていません。15節は「平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。」とは言っていなかったのです。彼は「キリストの平和」と口にしていました。つまり満足をもたらすこの「平和」というものは、私たちの平和でも、この世の平和でもないということです。わかります？ただキリストだけが所有する、キリストの与えてくださる平和のことを表しているわけです。そしてそんなキリストが与えてくださる平和というものを考えるときに、私たちは少なくとも二つの要素を聖書の中から見て取ることができます。一つは「キリストのもたらす神様との平和」です。そしてもう一つは「キリストのもたらす神様の平和」です。それぞれどういうことか考えてみましょう。

1) キリストのもたらす神様との平和

一つ目は「キリストのもたらす神様との平和」です。キリストはまず何よりも、私たちと神様との間に平和をもたらしてくださった、ということです。敵対関係にあった私たちと神様との戦いは、ただキリストのみわざのゆえに終わりを迎えたのだというわけです。覚えていますか？パウロは同じコロサイの中でこんなふうに記していました。ちょっと戻ってコロサイ1：19-20を見てみるとこう書いていました。「:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。」平和は、御子の十字架の血によってつくられたものでした。またもうひとつだけ別の箇所、ローマ5：1にもこのように記されています。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と。かつて救われる以前、すべての者が生まれながらに罪の中を歩み、みずから聖なる神様に逆らっていました。頑なに降伏することを拒んで犯行し続けていた私たちはみな、神様の怒りが注がれてしかるべき罪人でした。そんな私たちは敵として滅ぼされて、永遠にさばかれて当然の存在だったのです。しかしそのような私たちに対して、神様が愛とあわれみを示してく

ださいました。御子の十字架の犠牲を通して、この方を信じる者を義と認めてくださり、ご自身と和解させてくださったのです。罪によって壊れていた関係は、こうしてキリストにあって修復されました。敵として神様の御怒りの下にあった者たちが、今は同じ神様のことを「父」と呼び、そしてこの方の愛を受ける者とされたのです。すばらしいことだと思いませんか？ただキリストにあって私たちは今、神様との間に平和を持っているのです。それが、聖書が教えてくれていたことでした。でもキリストがもたらす「平和」というのは、これだけではありませんでした。

2) キリストのもたらす神様の平和

二つ目に言えるのは、「神様の平和」です。キリストがもたらしてくださるのは「神様との平和」だけではなく、同時に信じるすべての者のうちに「主ご自身の平和」を与えてくださるというわけです。ここで改めてキリストの成し遂げたことを思い巡らしてみてください。かつて神様に逆らっていた私たちは神様から遠く離れ、確かに敵として歩んでいました。罪を正しくさばかれるその神様の前に立つ日が必ずやって来ると突きつけられたときに、私たちはそこに恐れや絶望があったわけです。恐れがありました。でもそれも今は違いました。キリストが救いのみわざを終えられたからこそ、この方を信じる私たちはもう神様の敵ではなく、一つの神の家族とされました。キリストが罪の代価をすべて支払ってくださったからこそ、この方を信じる私たちは御怒りではなく、完全な救いを受けました。ただ神様の恵みのゆえに、私たちはこの世のどんなものも決して引き離すことのできない、そんなキリストにある神様の愛をすでに与えられたのです。だからこそ感謝なことに、キリストにあって私たちはさばきや罰を恐れる必要がもうなくなりました。いや、むしろどんなときも子どものように神様に助けを求め、すべてを信頼しながら歩いていくことができるようになったのです。私たちのわざではありませんでした。ただ神様がキリストにおいて恵みを示してくださったゆえでした。

どうです？皆さん。私たちがこの真理を知っているということ、これはどんなことがあろうとも、私たちひとりひとりにとって何よりも心に平安や満足をもたらすものではありません？以前、J・パッカーという先生もこんなことばを残していました。「自分が神を知っていて、神も自分を知っていてくださる、そしてこの関係が生前、死、また永遠にまで続く神の恵みを保障していると、そう完全な確信を心に持つ人の平安ほど、平和なものはありません。」と。キリストの平和は、この世が約束するようなものとは全く違いました。イエス様ご自身もはっきりとこのように言われていたのです。ヨハネ14：27にこう書いています。「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」ただキリストのもたらしてくださったその平和のゆえに、私たちはすでに神様との間に平和を持ち、その平和のうちに平安と満足を見出して歩いていくことができるのです。これらをすべて神様が恵みのみわざとして成してくださいました。私たちはそれに信仰をもって応答したのです。その平和のうちに私たちは歩いて行けると。

でも皆さん、ここで気づいてほしいのは、パウロは、「ではただそのキリストの平和というものを、考えていなさい。」とは言っていませんでした。パウロは「キリストの平和に、単に思いを巡らしたらいいですよ。」とも口にはしていませんでした。何て言っていました？彼はこう言っていましたね。

「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。」と。ここで用いられていた「支配するようにしなさい」ということばは非常に興味深く、新約聖書の中で一回、この箇所には登場しません。このことばには、もともと「決める」とか「統治する」「支配する」といった意味も含まれているのですが、特に、あらゆる競技などにおいて判定を下す、その「審判」を表すのに使われていました。考えてみてください。試合において審判がどんな役割を担っているかということ、彼らはその試合のルールに基づいてその場にふさわしい判断を下すのです。野球であれば、だれがストライクかボールなのかを決めるのか？それは審判です。サッカーならゴールなのかそうでないのかを審判が決めて、そして選手に

告げるのです。たとえそこで選手がその判定に不満を抱いて文句があつて騒ぎ立てたとしても、審判の判断を自分勝手に変えることはできません。それに従順に従うことが求められるのです。言い換えると、その場を制御しているのは審判であつて、選手や周りの観客ではないということです。そしてこれと同じように、パウロは信仰者たちの心が、キリストの平和によって支配されることを望んでいました。キリストがもたらされたその平和が、どんなときもどんな状態にあつても私たちの審判としての役割を果たすようにと求められていると、パウロは言うのです。もう少し詳しく言えば、私たちの心、つまり私たちの考えや思い、感情、行動…そういったすべてのことを、キリストの平和がいつも支配しているようにしなさい、と言っているのです。

では果たして、私たちはキリストの平和に自分の心を支配させているのでしょうか？それぞれの歩みを一度振り返ってみてください。先に見た、キリストによつてもたらされた神様との間の平和、そしてそこにある平安、それが、私たちが何かを考え、私たちが何かをするときの審判としての役割を、いつも果たしているのでしょうか？その平安に基づいて私たちはいろんなことを決めているのでしょうか？それとも、自分の思いや感情そして周りの観客たちや周囲の状況が、本来の審判に取って代わっていたりしないのでしょうか？

少し自分のこととして具体的に考えてみてください。例えば普段の生活の中にあつて、私たちは心を騒がすような場面に出くわすことがあります。先の見えない困難が降りかかれば、恐れや不安を覚えそうになってしまうことも、だれかとの間に問題が生じることがあれば、悲しみや憤りを覚えそうになってしまうこともあるでしょう。また、自分の期待通りに物事が進まなければ、不平不満を覚えそうになってしまうこともあるでしょう。問題は、そのような場面に置かれたときに、いったい何によつて自分の心を支配させているか、ということです。私たちの思いや行動は、いったい何を基としてそれを決めているのか、ということです。果たして私たちは、キリストがもたらしてくださった平和に心を留めるということに熱心に求めているのでしょうか？

かつてイエス様はこんなことばを弟子たちに残していました。ヨハネ 16 : 33にこう記されています。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあつて平安を持つためです。あなたがたは、世にあつては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝つたのです。」イエス様ははっきりと約束しておられました。この世において、残念ながら私たちは悩みや難しさを覚えるようになるということ、それぞれから喜びや平安を奪おうとするいろいろな患難が待っているということ。でもその中であつてこそ「恐れる必要はない」と私たちに言われていたのです。その中であつてこそ、私たちは勝利されたキリストにあつて勇敢でいることができるというわけです。確かに私たちは先に不安や心配を覚えそうになることもあります。でもキリストが救いを成し遂げてくださったということを覚えるときに、すでに私たちは永遠の希望を持って生きていくことができるのです。確かに周りの状況に恐れや悲しみを覚えそうになってしまうこともあります。でも、キリストにある神様の愛から引き離すものがもう何一つとしてないということを知るときに、私たちは今この神様に、このキリストに変わらない信頼と安心を持って生きていくことができます。キリストが成し遂げてくださったことを覚えるときに、私たちはその中であつて勇敢に歩いていくことができるのです。ローマ 8 : 31-32でもこう言っていました。「:31…神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。:32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」と。こうしてキリストがご自身の平和というものを与えてくださったからこそ、値しないものをすでに与えてくださったからこそ、私たちはこの平和のうちにあつて、いつも平安を見出しながら歩いていくことができるのです。それは、この世が与えることのできるものではありません。ただキリストを信じる者に与えられた、それが神様からの最高の平安でした。もう神様と敵対関係にないと。神様の子どもとして歩いていくことができると。

その真理を私たちが覚えるときに、そのキリストの平和に私たちは心を支配させるときに、私たちは勇敢な者として歩いていくことができるのです。素晴らしいことだと思いませんか？

でもここで覚えていてほしいのは、パウロはすべてのことばをこれで終えていたというわけではなかった、ということです。15節は「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。」で終わっていたわけではありません。彼は「ただ信仰者がそれぞれ神様との平和を味わって、平安に満たされながら歩いていきましょう、それでも大丈夫です。」と教えていただけではありません。そうではなく、この平和には、ある別の効果があるのだと宣べていたのです。

2) 効果：“キリストの平和”はどんな働きをするのか？ 15b-c節

a) キリストの平和は他の信仰者への平和を生み出す 15b節

ではいったい、キリストの平和はどんな働きをするのか、二つ目、効果が15節の続きにこのように書かれていました。「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。」聞きました？「そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。」と。いったい何を言わんとしていたのでしょうか？ポイントはこういうことです。私たちの神様との間の平和は、同じように召されたほかの信仰者との間の平和にも必ず結びつく、ということです。私たちが神様との平和—縦の平和を持っているのだとすれば、兄弟姉妹との平和—横の平和というものも持つようになるのだと言うのです。二つのものは決して切り離すことができない、とパウロは教えていました。だから、自分だけOK、自分だけ平和を持っていてほかの兄弟姉妹はいりません——こんなクリスチャンはいないのです。キリストの平和を持っているのなら、キリストの平和は私たち自身の内に働くものだけではなく、そこから必ず流れ出して、ほかの人との平和をも生み出す、というわけです。それがキリストの平和の働きでした。神様との間に平和を持っている者は、兄弟姉妹との間の平和をも必ず熱心に求めるようになるのです。皆さん、これは非常に大切なことでした。なぜなら、みことばを見ていくとほかの箇所でも、信仰者がみなキリストにあってまず一つのからだに加えられてともに生きている、ということを繰り返し教えてくれていました。ローマ12：5にもこう書いています。「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」「大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり」と。Iコリント12：12-13にもこう書いていました。「12 ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」と。こうして神様との平和を与えられた者は、同じキリストの平和にあって一つとされました。それぞれが異なる平和を受けたのではありませんし、自分でさまざまな平和を勝ち取ったような者はひとりとしていません。ただ神様の恵みによって同じ平和を味わった者たちが神の家族としてすでに召されたのです。その結果、私たちは同じ神様を父として愛する兄弟姉妹と、今一つのものとして生きているというわけです。だからこそ、そのように一つとされた者たちが一致しながら一つのものとして一緒に歩いていこうとするとき、互いに自分の心をキリストの平和によって支配させ続けるということは欠かせないことでした。チャールズ・スポルジョンもこのように述べています。「互いに仲違いしてはいけません。あなたがたは平和に召され、一つのからだにあって大切にされているのです。からだの中で片方の手がもう片方の手と争うことがあるでしょうか。足と目が争うでしょうか。そんなことは当然ありません。それらは一つのからだの中にあるのです。だから、あなたも一つのからだにある他の兄弟姉妹に同じようにしなさい。全ての争いを捨ててしまいなさい。」と。だからもし私たちが兄弟姉妹との関係において自分の感情や思いに支配されて、何によって一致しているのかということをおぼえてしまうなら、その関係はより難しさを覚えるようになるでしょう。またもう一つ、もし私たちがすでに一致をもたらしているものに、ではなくて、「あなたとは考え

が合いますね。あなたとは意見が合いますね。」と言って自分が今一致できるものに関係の土台を見出そうとするなら、どうなるか？おそらく似たような人とだけ関係を築くようになるでしょう。そんな弱さを私たちは持っているのです。でも、だからこそ私たちはいつも覚えていなければいけませんでした。私たちの土台はいつも、キリストの成し遂げられたそのみわざのゆえだということです。キリストの平和によって一つとされている私たちは、その平和に心を留め、その平和を互いに示し合いながらともに歩いていこうとするのです。すでに私たちがよく知っている通り、私たちの間にはいろいろな部分で、違いはあります。その違いが原因で争いや問題が起こることさえあります。だれかがあなたを傷つけるときがあるかもしれないし、あなたがだれかの不満や憤り、痛みの原因を引き起こすことすらあります。でもそういった違いが私たちの間を引き離そうとするのなら、キリストの平和を働かせて、すでに互いに受けたその平安をお互いに示し合おうとするのです。そのようにして私たちはキリストにある一致というものを守ろうとするわけです。

皆さんどうでしょう？果たして私たちはキリストの平和に支配されて、その平和を互いの間で示そうとしているのでしょうか？だれかとの間に問題が起こるようなときに、皆さんは先に何を考えます？果たして私たちは、私たちの愛するイエス・キリストが和解をもたらしてくださったこと、問題が起きているその兄弟との間に神様がもうすでに和解をもたらしてくださっていることを思い出そうとしているのでしょうか？神様が与えてくださったその平安を持っている者が、その平安でもってその相手を、寛容をもって、忍耐をもって接しようとしているのでしょうか？キリストの平和が自分のことだけではなく、だれかとの間のことにおいてもいつも審判となっているのでしょうか？パウロは、キリストの平和をそのように働かせていくことを求めていました。キリストの平和を受けているから、そのようにして生きていくことが私たちには求められていたのです。でも実はこれだけがキリストの平和の働きでもありませんでした。

b) キリストの平和は感謝を生み出す。 15 c 節

最後にパウロは15節をこのように締めくくっています。「また、感謝の心を持つ人になりなさい。」と。もしかするとある人は最初に読んだ時に、唐突さを感じたかもしれません。「平和」と「感謝」に何の繋がりがあるのだろうかと思ひに思ったかもしれません。でもこのように見てきてよく考えると、そこには絶対に切り離すことのできない関係があると思いませんか？私たちが、キリストがもたらしてくださったその平和に心を留め続けていくなら、私たちにできるふさわしい応答はいったい何になるのでしょうか？それはもう「感謝」しかないのです。ただ値しないものを与えてくださった方に対する賛美と喜びしかないのです。キリストが成し遂げてくださったその平和というものは、私たちのうちにおのずとあふれんばかりの感謝を生み出すのだというわけです。だからこそ皆さん、もし自分がキリストの平和によって支配されているのかどうかわからないと言うなら、自分が感謝しているか感謝していないのかということを考えてみることです。パウロは言っていました。「キリストにあるその平和というのは、私たちの内におのずと感謝を引き起こす。」と。「私たちが、キリストが和解をしてくださったその平和に思いを留め続けているなら、そのすばらしさによっておのずと感謝を引き起こす。」と。

振り返ってみると、このことばを記していたパウロというのはまさに感謝をささげる人でしたね。この同じコロサイの中でも、パウロは神様への感謝を何度も何度も口にしていました。コロサイ1：3にはこう書いています。「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」と。パウロは挨拶でまず感謝をささげていました。少し進んで12節を見ても「また、光の中にある聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。」とパウロは祈っていたのです。また来週から続けて見ていくコロサイ3：16の終わりからこんなふうが続いていますね。「16…感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、

主によって父なる神に感謝しなさい。」と。覚えていますか？パウロがこの手紙を書いた時、彼はローマの獄中に置かれていました。私たちがその状況だけを考慮するなら、彼は喜ぶことや感謝することが容易にできるような状態にはなかったのです。でも、それでもなお彼はどんなときも喜んでいました。コロサイの手紙だけではありません。私たちがピリピの手紙やほかのいろんなところを見ても、彼はずっと神様に感謝し続けていたのです。まちがいなく彼の心は、いつもキリストの平和によって支配されていたことでしょう。キリストが成し遂げてくださった神様との平和に、いつも心を留め続けていたでしょう。そしてそこに心を留め続けていたからこそ、彼は神様に対する賛美を忘れることがありませんでした。

そして、これは私たちも同じだということです。私たちもすでにパウロと同じ救いを受けました。同じ神様に信頼してすべてを委ねていくことができる幸いにもあずかっているのです。そのように私たちが感謝の心を持つ人として歩んでいくことを、神様も望んでおられました。Ⅰテサロニケ5：18にこう書いています。「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」「すべての事について、感謝しなさい」と。そうであるなら皆さん、果たして私たちはすべてのことについて感謝する者として歩んでいるでしょうか？値しないものをすでに受けた者として、それを与えてくださったその主に喜びの心をいつも表し続けているのでしょうか？さっきも言いましたが一つ言えるのは、私たちの心がキリストの平和によって支配されているかどうかは、私たちが感謝の心を持っているかどうかでよくわかるということです。もし仮に私たちの心が、すでに与えられているものよりも与えられていないものにずっと捕らわれ続けていれば、当然そこに感謝は出てきません。もし仮に私たちの心が、自分が値しないものを受けたのだということよりもほかの人が持っているものをずっとうらやみ続けているなら、当然そんなところにも喜びなどは出てきません。でも皆さん、私たちが本来値する永遠のさばきではなくて与えられている神様の平和を覚えるなら、そこには常に感謝することのできる理由があるということです。そう思いませんか？なぜならどんなものが与えられたとしても、それは、私たちにとっては値しない恵みだということです。値したのはただ永遠のさばきでしかないそのような者に対して、それ以外のものは恵みでしかありませんでした。だからこそだれかと比べるのではなく、与えられたもので満足することです。持っていないものに不平不満を抱くのではなく、恵み深い神様にあつて、同じ感謝を持つ兄弟姉妹と一緒に感謝をささげながら歩んでいくことです。それがキリストの平和を受けた者にふさわしい歩みでした。

だからこそ、もしまだこの中にキリストの平和を自分のこととして知らないという方がおられるなら、その方はまず何よりも、私やあなたのような罪人のためにご自身のいのちをささげてくださった救い主イエス・キリストの救いを求めてください。きょう見てきたこの歩みというのは、神様との平和を知った者だけにできる歩みです。世にはこのような平和はありません。だからもしその平和を知らないなら、そもそもまだあなたは神様と敵対関係にあるということです。この聖なる神様の前に立って、そこでさばかれ、罰を受けるその日がやって来るとことです。だからこそ、きょうまだその救いの約束があるときに、望みがあるときに、自分の罪を悔い改めて救い主を信じ受け入れてください。この世が決して与えることのできない神様にある平安を手にして、偉大な神様のために生きてください。

またもうすでにこのイエス・キリストの平和を自分のものとされていると言う皆さん、どんなにすばらしい平和をすでにキリストがもたらしてくださったのかを忘れてはいけません。確かに、ほかの兄弟姉妹との関係において、心を騒がせるような場面はこれからも出てくるでしょう。自分の思いや感情に支配されそうになることもあるでしょう。でもそんなときにこそ、兄弟姉妹が何をしたのかに心を留める前に、キリストの平和が、その兄弟とどんな関係へとすでに召し入れてくださったのかを思い出すことです。そしてそれを思い出すなら、私たちは今別々に生きているのではありません。キリストのからだとして、一つのものとして生きているとみことばを覚えておりました。そのような関係を自分で

勝ち取った者はひとりとしていません。ただ神様の愛と恵みが、そのような特権を与えてくださったのです。だから皆さん、感謝しつつ、キリストの平和に心を支配させ、喜びながら歩み続けていくことです。最高の平和はもう与えられました。その受けた平安を覚えながら、受けたその平和を互いに示し合って、ますます堅く一つのものとなっていくことを目指し、その主のすばらしさを証しする者としてともに生きていきましょう。